

遊びたい！続けたい！またやりたい！

～人とつながる力を育てる環境と教師の援助～

墨田区立緑幼稚園

園長 河原 宏子

1 主題設定の理由

幼児は、安心、安定した幼稚園生活の中でモノや人と出会い、心を動かされる体験を通して様々な学びを得ていく。しかし、幼児は学びたいと思って行動しているわけではなく、「やってみたい」「知りたい」「関わりたい」という心の動きが原動力となり、モノや人と関わる中で「面白い」「楽しい」「今度はこうしてみよう」などさらに心を動かし、モノや人と向き合いながら様々な学びを得ていくのである。特に人との関わりにおいては、自分の思いを自分なりの言葉や動きで表現し、それを受け止めてもらった喜びから「もっと関わりたい」「一緒に遊びたい」という思いをもち、人とつながっていく楽しさを味わっていく。自分の思いを伝える、相手の思いも聞く、伝え合う喜びを知る、その過程の中で人とつながるためのツールである「言葉」も発達し、社会性も育まれていくと考える。

本園の幼児は、人と関わるのが好きで積極的に触れ合うことを楽しんでいる。その一方で、人と関わるために必要な言葉や思ったことを言葉で相手に伝えることが難しく、上手く伝えられずに我慢してしまったり、思いがけず手が出てしまったりする幼児もいる。昨年度の本園の学校評価では、「人と関わる力を身に付けて、遊んでほしい」という意見が多く寄せられ、人間関係の構築への関心が高いことが分かった。

そこで遊びを中心とした保育を通して、「遊びたい！続けたい！またやりたい！」という心の高まりを大切にしながら、その中で人と関わる楽しさや人とつながる喜びを味わわせたいと考えた。そのためには教師の存在やモノや人との出会いの場が重要な要因となる。その場をどのように設定し、どのように援助していくかを知りたいと思い、テーマを設定し、研究を進めていくこととした。

2 研究のねらい

遊びを通して思いを伝え合い、人とつながる楽しさを味わう幼児を育成するための環境の工夫や教師の援助の在り方を探る。

3 研究の内容及び方法

- ① 幼児の実態を出し合い、目指す幼児像を KJ 法を用いて教師間で共通理解する。
- ② 発達の時期に応じて、幼児が「遊びたい！続けたい！またやりたい！」と思う原動力となる遊びの環境の構成や教師の援助について分析、考察をし、発達の段階を 3 期に分類する。
- ③ 遊びを通して、教師と幼児、幼児と幼児との関わりの中で自分の思いを言葉や動きで表現できるよう指導、援助の工夫を行い、教師の援助のポイントを明らかにする。

4 人とのつながりを意識した発達の姿と援助のポイントについて

人と関わり、関係性を築いていく段階は、どのようなものか話し合い、「出会い・関わる」「つながる」「深まる」と分類し、共通理解をした。また、幼児が遊びを通して人と関わる場面に着目し、事例検討を重ねていく中で、「心の動き」「イメージ」「行動や言葉」「友達との関係」の要素に分け、分析し、援助のポイントも明らかにした。

【出会い・関わる】

○様々な人々の存在に気づき、人々の言動に興味、関心をもつ。

心の動き ・ 思いをもつ ・ 思いを出す ・ 思いを膨らます ・ 思いを言葉で言う
イメージ ・ 自分なりにイメージをもつ ・ 自分のイメージを楽しむ
行動や言葉 ・ 思い付く ・ 表情や身振りで表す ・ 関わりに必要な語彙を使える
友達との関係 ・ 友達に気付く ・ 友達っていいなと感じる

○援助のポイント

- ・心地よさや安心感がもてるような居場所作りをする。
- ・友達と同じ物を持ったり、同じ場で遊んだりできるような場の工夫をする。
- ・幼児の思いに寄り添い、教師との信頼関係を構築する。
- ・必要な言葉の選び方を知らせる。
- ・表情や身振りで表せるようにするとともに、関わりに必要なこと（語彙・やり方）を知らせていく。

【つながる】

○自分の思いを伝えたり、友達の思いも受け止めながら一緒に活動したり遊んだりすることを楽しむ。

心の動き ・ 思いを伝える ・ 思いに気付く ・ 思いを受け止める
イメージ ・ イメージが重なる ・ イメージが伝わる ・ イメージが分かる
行動や言葉 ・ 言葉で話せるようになる ・ 遊びのやり方、関わり方が分かる
・ 話が聞けるようになる
友達との関係 ・ 友達を受け入れながら一緒に動ける ・ 友達と一緒に遊べる

○援助のポイント

- ・自由感のある雰囲気をつくり、あるがままの自分を出せるようにする
- ・幼児の思いや言動を引き出し、実現に向けて援助し、満足感が得られるようにする。
- ・友達と同じ動きや行動が楽しめるような場の構成や素材や物の出し方を工夫する。
- ・相手を意識したり、相手の動きや言葉に気付いたりできるような言葉掛けをしていく。
- ・言葉で話したり、伝えたり、聞いたりできるような機会をつくったり、遊びの中での幼児同士の関わりを見逃さずに積極的につないだりしていく。

【深まる】

○友達と互いの思いを認め合いながら、活動したり遊びを進めたりする充実感を味わう。

心の動き ・ 思いを受け止め合う ・ 認め合う ・ 分かり合う ・ 生かし合う
イメージ ・ イメージを確認し合う ・ 共通のイメージがもてる
・ 互いのイメージを認め合う
行動や言葉 ・ 言葉で聞いて相手の気持ちが分かる ・ 話が聞けるようになる
・ 互いの思いをくみ取り、関わり方を自ら見いだす

友達との関係 ・友達と一緒に進める ・友達と一緒に創り上げる

○援助のポイント

- ・ 同じ方向性や目的をもって友達と一緒に進められるように、課題の提示や遊びのテーマを投げ掛けるとともに、達成感や充実感が味わえるようにしていく。
- ・ 相手のよさ（特徴、性格）に気付き、友達の言動などを受け入れながら遊びが進められるように言葉を掛けたり、見守ったりしていく。
- ・ 一人一人の思いや考えを認めながら、自分で考え、判断できるように援助していく。
- ・ 互いに対応した伝え方ができるように橋渡しをしていく。

5 実践事例

（１）２年保育４歳児５月 「レストランごっこ」 （出会い・関わる）

①ねらい

○自分の好きな遊びを見付け、同じ場にいる友達や教師と一緒に関わり遊ぶことを楽しむ。

○イメージの中で、自分なりの思いを動きや言葉で表しながら遊ぶ楽しさを味わう。

②エピソード （下線は、教師の援助）

好きな遊びの中で、A児、B児、C児、D児が、食べ物や皿などを持ってきて、ごっこ遊びを始める。教師は遊びに参加しながら、「ここはお家かな？それともレストラン？」と問うと「レストラン」と答える。A児とD児は、ウレタン積み木で囲いを作り始める。教師は一緒にウレタン積み木でカウンターを作ったり、机を置いたりしながら、場を整える。布をテーブルに掛けると「それ、いいね。レストランみたい！」とD児が喜ぶ。他児も「いいね」と笑う。教師と友達の姿を見て、遊びに加わる幼児もいる。キッチンに入ったり、客になったりと自由な雰囲気の中で、多くの幼児が出入りする。

教師は、遊びを見付けられずにいた、E児を誘い一緒に客役になる。教師はメニューを見ながら、E児に問い掛ける。E児は、「これ」と指をさしたり、小声で「ぼく、これ食べたい」などと教師に言ったりする。教師は「すみません。〇〇2つお願いします」などと店員役の幼児に言う。

しばらくすると、いろいろな料理が運ばれてくる。E児は、嬉しそうな表情をし、食べる仕草をする。E児は、「今度はこれにする」とメニューを指さし、教師が代弁することを繰り返す。「E君も一緒に言ってみよう」と教師が言うと、小さな声で「〇〇ください」と声を出すようになっていく。友達が反応してくれると、教師の方を見て、ニコッと笑う。そのやりとりを何度も繰り返していると「ぼく、自分で言ってみようかな」と教師に伝える。教師は「いいね、きつとお店の人、美味しいものをもってきてくれると思うよ」と言うと、「うん」と頷く。じっとメニューを見ているE児は、友達の動きを見ながら声を掛けるタイミングを見計らう。近くに来たエプロンを付けたF児に「ちょっといいですか」とE児が声を掛けると「なんですか？」とF児。「ブドウジュースください」と言うと、「はい、まっけてください」とF児が答える。ブドウジュースが運ばれてくると、ニコニコしながら飲む仕草をする。

教師は「E君すごいね、自分で言えたんだ」と言うと、「次は何にしようかな」と言う。その後、教師が少し離れたところで見ていると、友達の輪の中で、何度も注文しながら、友達との関わりを楽しんでいた。



③考察

- 興味をもった時に、いつでもだれでも参加できる空間と雰囲気があったことで遊びが盛り上がり、友達と関わって遊ぶ姿につながった。
- テーブルクロスやカウンターがあったり、メニューを置いたりしたことで、レストランという共通のイメージの中で遊ぶことを楽しむことができた。
- 互いの動きが見合える限定された場であったため、遊びや動きが広がりすぎることなく、イメージの中で遊ぶことを楽しむことができた。
- 教師が一人一人のありのままの姿を受け止め、言葉や仕草で返していったことで、安心して自分を出す姿につながった。
- E 児は、教師に遊びに誘ってもらったり、傍にいてもらったりしたことで安心して遊びに参加し、少しずつ楽しさを見出していくことができた。

(2) 2年保育 5歳児 9月 「恐竜作り」(つながる、深まる)

①ねらい

- みんなでする活動を楽しみながら、友達のよさに気付いたり、様々な友達への親しみを広げたりする
- 自分たちなりの目的に向かって、力を合わせたり、分担したりしながら遊びを進めていく楽しさを味わう

②エピソード

好きな遊びの中でダンボールを組み合わせて大きな恐竜を作り、形になると、恐竜ができたことを喜んだ。そのうち「体や顔が四角いとおかしい」という声があがり、新聞紙で丸みをつけることになった。A 児、B 児、C 児、D 児、E 児が、新聞紙を丸めることが楽しい様子で、何枚も丸めはじめる。

少し新聞紙がたまってきたところで、「この辺（お腹）にしようかな」「こっちの背中にも…」などと言いながらそれぞれが新聞紙をダンボールにあてる。その姿を見て、F 児、G 児も加わる。

A 児は片手で新聞紙を押さえながら、もう一方の手でセロテープを切るのは難しいようで苦戦していたため、「お助まん」と教師が押さえる係になる。A 児は、何箇所か留めたところで、「ここはこれでよし！」とまた違う新聞紙を丸め始める。しばらく、それぞれが活動を進めていると、B 児は「椅子に乗ったり降りたりすると疲れるな～」という。それを隣で聞いていた A 児は、「私切る係になってあげる」と B 児に言う。B 児は、そのアイデアを受け入れ、A 児からテープを受け取り、張り合わせる。A 児は、一人でやっている C 児に気付き、C 児にもテープを渡し始める。「これなら楽チンだね」と C 児は、自分と同じようにしてもらっている B 児に声を掛けている。「すごいね、A ちゃんが切る係で、B ちゃんと C ちゃんが貼る係なのね」と教師が言うと、「いい考えでしょ」と A 児。それを聞いていた E 児は、隣にいた F 児に「2人でやろう」と提案している。E 児が切る係で F 児が貼る係になった。「そちらは、E ちゃんが切る係で、F ちゃんが貼る係なのね」と教師が言うと、2人で顔を見合わせてニコッと笑う。

途中、D 児が加わり「ぼくはね、どこが貼るところかを教える人になる」と教師に言って来る。「それはいい考えだね、その係の人もいた方がいいもんね。みんなに言ってごらん」

と促すと、「ぼく教える係でもいい？」とその場にいる友達に問う。みんなから了承を受けると「こっちお願いします」「今度はこっち」などと指を指しながら友達に教えている。

他の遊びから帰ってきた友達に「恐竜が大きくなってる」「すごい」と言われ嬉しそうな表情をする。集まりのときに、役割分担していて頑張っていたことを教師が学級全体に広めると「すごい」と拍手をもらった。「係を決めたから早くできたんだよ」とD児は皆に伝えた。



④ 考察

- 「恐竜をつくりたい」という目的が明確にあったことで、自分たちなりの見通しをもって遊びを進めていくことができた。
- 教師がすぐに答えを出すのではなく、行動で示したり、友達の姿に気付けるような言葉を発したりしたことで、自分もやってみようとする姿につながった。
- 初めのうちは、個々の取り組みだったが、活動を進めていく中で、友達と協力すればできるということや役割分担をすれば早くできるということ、また自分のアイディアを受けいれてもらえた喜びや、やり遂げた満足感など、様々なことを学ぶ機会となった。

6 まとめと今後の課題

（１）研究を通して分かったこと・成果

人とつながる力を育てていくためには、教師の役割が重要であることを改めて再認識した。ここでは教師の援助に視点を当てて、分かったことを具体的にまとめた。

○安心・安定が基本

幼児の心が動くときには、必ず温かく見守られているという安心感が基本となる。人への信頼感をもち、自分なりの表現をしていくためには教師が心の支えになることが大切、ということを再確認した。

○遊びたくなる環境の工夫が大事

「遊びたい！続けたい！またやりたい！」と思える遊びが、幼児の「人と関わりたい」、「つながりたい」という気持ちを高めていく。幼児が今何に興味・関心をもっているのかを見極め、教材の準備や環境の構成をしていくことが重要である。

○思いをつなぐ役割を担う

言葉を使って表現する意欲を高めていくためには、遊びを通して、幼児が言葉で伝えたいような経験や、考えたことを自分なりに話し、受け入れてもらう快体験を積み重ねていくことが大切である。その役割を担っていくことが教師には求められる。

○共感、共同を積極的に行う

友達や教師に受け入れられた喜びが自己肯定感を育み、自信となって行動する姿につながる。教師は一人一人を丁寧に見守り、共感し、時には共に行動することが大切である。

（２）今後の課題

今回は、3 期に分けた大きなくくりの中で幼児の姿や援助のポイントを探ってきたが、今後は更に細かく分類し、異なる視点からも幼児の育ちを見つめ、その援助の在り方を探っていきたい。